会津放射能情報センターNEWS

住　所：〒965-0877 福島県会津若松市西栄町 8-36　Tel & Fax：0242-23-9401
開館日：水木金土曜 10 時～ 16 時（国民の休日を除く）
E-mail ： info@aizu-center.org　公式 blog：http://ameblo.jp/mamorukai-aizu/
Web ： https://aizu-center.org

2022 年 3 月 20 日発行　第 38 号

会津放射能情報センター　検索

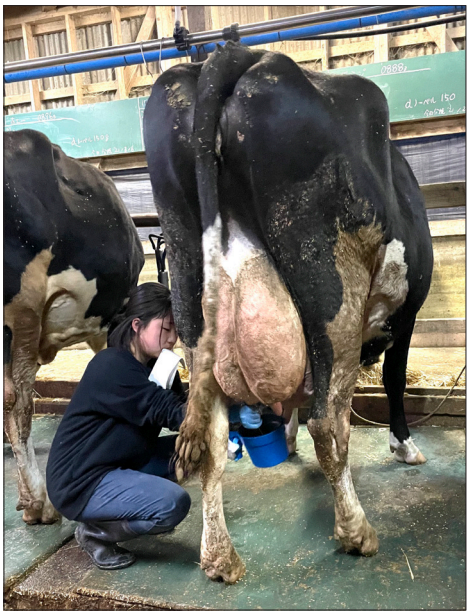
いのちをはぐくみ、いのちをつなぐ

会津放射能情報センター代表　片岡輝美

この 1 月末と 3 月中旬、私はとてもユニークな教育を行っている二つの高校で福島の今をお話しする機会が与えられました。1 月に伺ったのは島根県江津市にあるキリスト教愛真高等学校、3 月に伺ったのは三重県伊賀市にある愛農学園農業高等学校です。二校は「姉妹校」ですが、お招きが続いたのは偶然です。

共に一学年 20 人程度の全寮制で学生は全国から集まり、殆どの教職員は学校敷地内に居住。自然豊かな環境で学び、労働、食を大切にする教育が行われています。

愛真高校の一日は朝 6 時から。3 回の食事は生徒が調理しますから、当番はもっと早い時間から朝食を準備します。農業校である愛農高校では朝 5 時 30 分から家畜の世話が始まります。携帯電話は持たず、パソコンやテレビはない、または制限された生活ですが充実した図書を活用し、新聞を熟読し、友人や教員と語らうなかで自分と社会、世界に向き合う力を養っていきます。私が滞在したのは数日ですが、頻繁に話しかけられました。なぜ原発に反対なのか、廃炉は可能なのか、被害の実態に無関心であった自分に気づきこれから何ができるのか……。言葉を探しながら訥々と話す姿に心が熱くなりました。



両校は東電福島第一原発核事故からほどなく、原発に関する特別授業を開始。各方面から講師を招き、学びと討論を続けています。

昨年、愛農高校が招いたのは小出裕章先生。原発の危険性を分かりやすく講演した後、先生は「大飯原発や美浜原発で事故が起きた時、放射性プルームがここに到達する 3 時間の間に何ができるのか」との設定を提起しました。愛農生は安定ヨウ素剤を服用し、屋内退避に備え校舎や寮、牛舎や豚舎などの目張りをし、家畜飼料の上にシートをかけること。自分たちの安全を確保しつつ避難者の受け入れ準備を行うことを話し合い、さらに自らの避難を検討しました。全国の学校に「処理水」の一方的な理解を求めるチラシ約 230 万枚を配布し、福島県内で放射能安全論の講義を行うだけの国と、どちらが「いのちを守るための教育」であるのかは明明白白です。

両校には原発核事故から避難した経験を持つ学生が複数います。愛真高校の男子生徒は栃木県から数ヶ所避難し、今、ご家族は沖縄に居住。原発事故訴訟の原告として、近々意見陳述をするとのこと。凛とした表情が印象的でした。

愛農高校は事故直後、飯舘村で農業を営んでいた卒業生・村上真平さんが率いる避難者を多数受け入れ、生活を支えました。そのひとりであった女の子が長じて愛農生になりました。「自分には福島市の家やいとこたち、友だちと別れる避難はとても悲しい経験だった。でもなぜ親が避難したのかが、良く理解できた」と話してくれました。

もう一人の愛農生は栃木県から関西へ避難。「変わり果てた地震後の家の記憶、大切な人との別れ、また原発事故での引っ越し……。当時 6 歳だった私には受け止められないことばかりだった。それでも私より福島にいた人が心に大きな傷があるから、と比べて何も言わなかった。でも片岡さんの『痛み比べはしなくていい』という言葉にホッとした。私も悲しいと言っていいんだと思った」と感想に書き、出立する私に駆け寄り、穏やかな表情で挨拶してくれました。

毎年 3 月が近づくと、自分はこれまで何をやっていたんだろう…との無力感を感じます。しかし、この二校訪問は私の原点に戻る時間となりました。豊かな自然を学び舎として牛や豚、ニワトリ、農作物を育てる若者たち、自分のいのちと他者のいのちを慈しむことを学ぶ若者たち……。その環境と未来を守るために原発は要らない、彼ら彼女らを避難させる可能性がある国策そのものが大きな誤りであることを再確認しました。

大地にしっかりと立つ若い世代に倣い、私も会津若松の地でいのちを守る働きを続けたいと思うのです。

どうぞ「ネットで検索」してみてください。
キリスト教愛真高等学校　https://aishinhigh.ed.jp
愛農学園農業高等学校　https://ainogakuen.ed.jp

「絶望」「現実」を確認する場で自分の尊厳を考える

同志社大学 大学院　佐久川 恵美

■はじめに

会津放射能情報センター NEWS をご覧のみなさま、こんにちは。私は京都にある同志社大学の大学院生で、生活や暮らしの視点から福島原発核事故について考えています。2017 年から会津放射能情報センターに何度もお邪魔し、お世話になる過程で多くの学びや気づきを得てきました。

今回は、①そんな気づきを日本オーラル・ヒストリー学会で報告したときの様子と、② 3 月 11 日を迎えるにあたって最近考えている「尊厳」について書いてみようと思います。

■日本オーラル・ヒストリー学会での報告

◎報告した内容

2021 年 9 月 5 日､日本オーラル･ヒストリー学会(2003 年設立、会員数 275 名）の第 19 回学会大会がオンラインで開催されました。参加者は総計 100 名近くおり、私の報告時には 44 名いました。報告時間は 20 分で、報告のタイトルは「『徹底的に絶望する』ところから福島原発事故を捉える～福島県会津若松市における不安を語り合える場づくりを通して～」。代表の片岡輝美さんとの話で出てきた「徹底的に絶望する」とはどういうことなのか、片岡さんだけではなく酒井恭子さん、野木晃子さんのお話と、いただいた資料を参考に次の構成で報告しました。

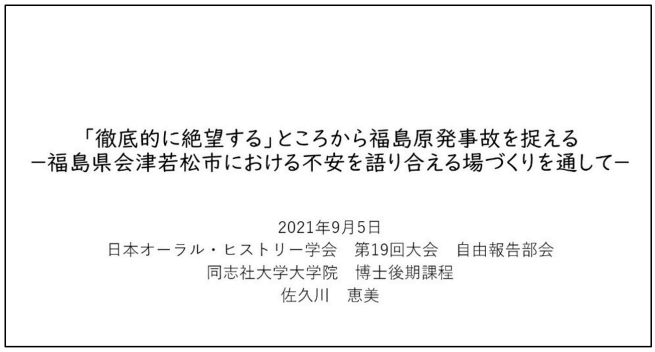


図１：報告したスライドの表紙

⑴「ホント」の知識が「語りを阻むカ」につながっている。低線量被ばくの健康影響は明らかになっていない部分があるにもかかわらず、国は「ホント」の知識を設定して健康影響は科学的に証明されていないと主張しています。そして被ばくの影響を不安に思うことは知識不足・偏見・差別だとする言説をつくりだし、事故や被ばくの問題を個々人の理解力の問題にすりかえることで不安を語りにくい状況、「語りを阻むカ」をつくりだしていると考えました。

⑵会津放射能情報センター設立の経緯と活動内容。⑴のような状況があるなかで、センターには「人の思いに寄り添う」「身の回りの放射線を測定する」という基本姿勢があること、センターが事故や放射線について話せる場になっていること、放射線測定を行っていることを紹介しました。これまでセンターが蓄積してきた食品や空間の測定数に、参加者は圧倒されている様子でした。

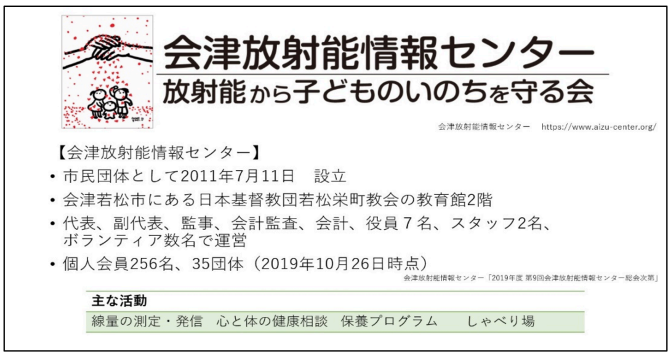


図２：最初にセンターの概要を紹介

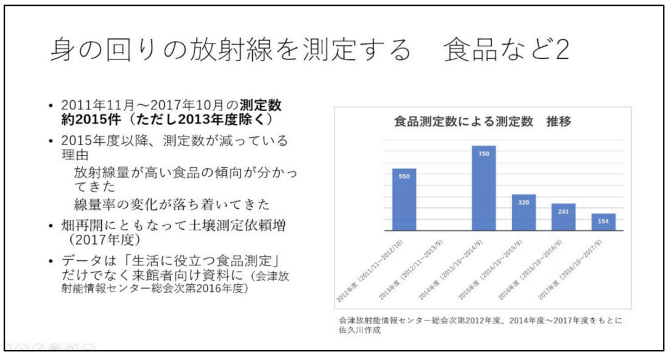


図３：資料をもとに測定数をグラフ化

⑶一人ひとりが自分にあった基準を考える。「ホント」では説明しきれない現実があるなかで、どの程度まで線量を気にするかは一人ひとり違います。センターは検出された数値に見解を示さないことで、背景・状況・思いなどが異なる個々人が、不安を語り、自分にあった基準をつくることができる場を目指していると考えました。また「ホント」を示さない姿勢が、「ホント」に抗う言葉をつくる場にも繋がっていると考察しました。

⑷「徹底的に絶望する」ことについて。片岡さんは私に「徹底的に絶望するところからこの局面に立ち向かわなければならない。唯一現実を見るということはそういうことなんじゃないか」と語ったことがあります。ここから､「徹底的に絶望」できない状況があるからこそこの言葉が出てきたのではないか、不安に思っていることを不安に思う必要はないと否定する「ホント」があふれる状況では、「徹底的に絶望すること」すらも否定されかねないのではないかと考えました。

これは絶望から希望を見出す話とは少し違っていて、ポイントは絶望することすら阻まれる点にあるように思います。だからこそ、希望ではなく現実をみるという表現をしたのかもしれません。そう考えればセンターは福島原発核事故が起こっている現実を確認する活動、現実を表現する言葉をつくりだす活動を続けてきたと言える

と思います。事故による様々な問題を個人の問題にとどめず、これまでの歴史・社会が引き起こしている絶望であることを問い、未来に記録を残す活動でもあると感じました。

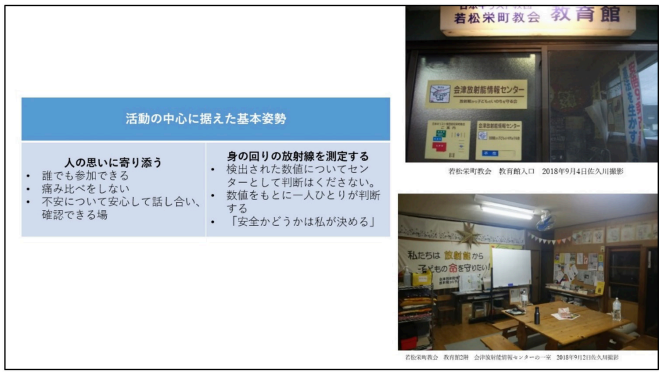


図４：センターの雰囲気を伝えるための写真

◎参加者の反応

報告に対して、参加者からは次のような質問や感想をいただきました。

●センターに足を運ぶ人たちは、避難先での生活についてどのような想いをもっているのか？（福島原発岡山訴訟に関わっている研究者）

●絶望するどころか不安を語ることができなくなっているというのは重要だと思った。自分はキューバの民族誌を書いているけれど、福島との共通点を感じた（福島県中通り出身の研究者）

●不安を「理解力不足」にすり替えず未来に向けて語っていくとはどういうことなのかなど様々な論点が示され、ひりひりとするようなライフストーリーの現場が紹介された（司会者）

参加者から想像以上の反応をいただきました。このような報告ができたのは会津放射能情報センターのみなさまや、センターで出会ってきた方々と言葉や思いを交わす機会をいただけたからです。特に片岡輝美さん、酒井恭子さん、野木晃子さんにはお忙しいなか報告用スライドを確認していただきました。この場をかりて改めて感謝申しあげます。

■尊厳を考える

「徹底的に絶望する」こととつなげて、最近は尊厳について考えています。「徹底的に絶望する」ことが「現実をみる」ことならば、一人ひとりにとっての「絶望」や「現実」があるはずで、それと同じよう個々にとっての尊厳があるのではないかと考えています。

そもそも尊厳とは何か。憲法学ではいくつか議論がありますが、次の点は共通しているようです。人権の根底には尊厳があり日本国憲法の基底にも尊厳がある。そして自分と同じように、自分以外の個人も多様な存在のまま等しく尊重されなければならない。

では別の視点ではどうかというと、哲学を専攻する堂囿俊彦は、尊厳の概念に曖昧な部分がある点に注目し、尊厳は状況や文脈によって傷つけられたり守られたりするからこそ、個別・具体的な場面で共に考えることが大事なのだと主張しました。この主張は、人類学の視点から『復興と尊厳』を記した内尾太一の考えにも通じます。「東日本大震災では、地震、津波、原発事故、それに伴う避難や移住などの過程でも、生命・生活はもちろん、人々がそれぞれに大切にしてきたもの、自分を支えてきたものを喪失したり傷つけられたりしてきたわけだが、それらの中で何が「尊厳」に関わるかは人それぞれに異なっている」。だからこそ「一人ひとりが日常生活のなかで何を守ろうとしているのか、何をされることによって深く傷つくのか考えること」が重要だと。

こうして考えれば、人の数だけ尊厳の中身は多様であると言えるかもしれません。また、場面によって尊厳に関わることが変化するのならば、個人の生を尊重する方法もその分多様であるべきでしょう。住む場所、家族や友人との関係、仕事や学校、生きてきた歴史、培ってきた価値観、感覚などが違う分だけ、一人ひとりにとっての「絶望」や「現実」があり、尊厳がある。福島原発核事故は、そんな尊厳を傷つけているものでもあります。

したがって、一人ひとりにとっての「絶望」や「現実」を確認できる場は、個々人が何を大切にしているのか、何に傷ついているのかをそれぞれのペースで表現できる安全な場でもあり、互いを尊重する方法を個別・具体的に考える場にもする必要があるでしょう。

とても難しいことですが、放射能汚染の問題、復興政策や避難によって生じている問題が様々な形で私たちに影響を与えていることを鑑みれば、今もこれから先もそのような場は欠かせません。これはセンターのみなさんはじめ各地でさまざまな人たちが試みていることですし、私自身もそのような場をつくる方法を模索している最中です。

最後に、ロシア軍によるウクライナ侵略の問題を尊厳の視点から少し考えてみます。ウクライナで市街戦が始まったことによって、避難する人たち、様々な理由で避難できない人たち、戦う人たち、亡くなった人たちがいます。そして、現在、核兵器使用の可能性・戦時下の原発事故の危険性から身を守る方法も合わせて考えないといけない事態になっています。

私は暴力そのものが嫌だし、命が危険にさらされることが嫌だし、殺すのも殺されるのも嫌です。核兵器の使用をほのめかされるのも、原発が事故を起こすのも嫌。核も戦争も、それらを成り立たせている社会構造も核共有みたいな考えも嫌。これらは、多くの人たちの命と尊厳を傷つけ、これまで反戦や核・原発のない世界を訴えてきた人たちの想いを踏みにじり、戦争や核や原発核事故で亡くなった人、傷ついている人がいることを軽視するものです。

だからこそ、これまでたくさんの人たちが声にしてきたこと・声にせずとも表現してきたこと・伝えようとしてきたことを反芻し考えながら、戦争も核の使用も原発核事故も嫌だと言いたいし、言うのに疲れたときは一人でも呟きます。

（さくがわ　えみ）

■ 21 年 12 月～ 22 年 3 月の感謝報告 ■

いつもセンターの働きをお憶えくださり、ありがとうございます。年会費および協賛金をお届けくださった方を記載しています。特記なき教会伝道所や教区などは、すべて「日本基督教団」です。万一記載漏れなどがありましたら、お手数ですがご連絡ください。12 月 10 日～ 3 月 15 日の受付分となります。（敬称略・到着順）

■個人

大木正人、藤原秀徳、ロブ・ウイットマー、圭子・ウイットマー、大城江利子、ジェフリー・メンセンディーク、伊藤裕子、北垣成子、島上きく、山口和枝、守川初穂、水戸喜世子、依光絵吏、西岡裕芳、くずめよし、髙戸佐和子、古賀悦子、西川幸作、菅野美智子、後藤由美子、小林順子、竹内款一、宮崎ひろ、中林正剛、廣野記子、梅津庸子、金澤正善、佐久間美千子、髙谷三郎、タナカマサヒロ、遠藤秀子、小幡正、岡山友呼、山本弘史

■団体

久米田教会、東所沢教会、平塚中原教会、河内松原教会、東洋英和女学院小学部母の会、保内教会、武蔵豊岡教会、日本ルーテル教団関東地区女性の会、久ヶ原教会、島原教会、日本聖公会東京教区聖マーガレット教会、桑名教会マナの会、No Nukes Goods Projects、姫路野里教会、みどり保育園、水口子どもの教会、水口教会、美唄めぐみ幼稚園、イエス団みどり野保育園、宿河原教会、日本聖公会東北教区婦人会、北光幼稚園、日本バプテスト宣教団池田キリスト教会、鶴川シオン幼稚園、西片町教会、めぐみ子ども園デイサービスセンター三愛、水沢教会、山梨英和中学校・高等学校、久万カントリー・チャペル、遠州栄光教会、宮古教会、熱田教会、香椎教会、須磨教会、南山教会青年会、松山東雲女子大学・松山東雲短期大学キリスト教センター、元江別わかば幼稚園、長崎銀屋町教会、滝川二の坂伝道所、刈谷教会、山本愛泉保育園花の会、いずみ教会、十日町教会、松山教会、中野桃園教会、水戸教会、認定こども園ひかりの子、認定こども園紫野幼稚園、下ノ橋教会、西千葉教会、甘楽こひつじこども園、浦安教会、甘楽教会、共愛学園中学・高等学校、世光教会、東神戸教会、富士見高原教会、桑名教会、矢吹教会、真駒内教会子どもの教会、北海道クリスチャンセンター、津久見教会、核問題連絡会、石橋教会ぶどうの会、相模翠ヶ丘幼稚園、溝ノ口教会、神戸教会、豊岡教会、青森教会、泉北栂教会婦人会、鎌倉恩寵教会、愛隣教会、茅ヶ崎堤伝道所、高槻南平台教会、神戸栄光教会、高槻教会、岡山教会、恵泉女学園大学キリスト教センター、西南学院高等学校、沖縄キリスト教学院、福岡城東橋教会、柳井教会、矯風会安中グループ、関西学院宗教活動委員会、桂教会教会学校、横浜英和学院、瀬戸内教会かな保育園、大阪西淀川教会、錦林教会、千里聖愛教会、横浜港南台教会、多度津教会、二宮教会、甲府ＹＷＣＡ、松山学院高等学校、いずみ愛泉教会子どもの教会、名古屋ＹＷＣＡ、武蔵野扶桑教会、伏見教会、新潟教会、天満教会、大牟田正山町教会、東北バプテスト連合、新生釜石教会、翠ヶ丘教会、今治教会、同志社教会、美唄教会、西大和教会、鹿児島加治屋町教会、横浜共立学園、紫野教会教会学校、佐敷教会教会学校、日本キリスト教保育所同盟、神戸教会「放射能から子どものいのちを守る募金」、大分教会、城崎教会、仙台北教会、経堂緑岡教会、国分教会、尼崎教会、聖光教会日曜学校、聖光幼稚園、農村伝道神学校、松本教会、台湾基督長老教会国際日語教会、宇部教会、兵庫教区教育部女性委員会、草津教会、荒尾めぐみ幼稚園

■支援品

中村純子、太平こどもの家、松山学院高等学校

■署名のご協力に感謝いたします。

各団体から署名感謝の言葉が届いています。引き続きのご協力をお願いいたします。

■ 2022 年 2 月～ 4 月の活動報告と予定 ■

■ 2 月

3 日、8 日、子ども脱被ばく裁判の会会計監査
14 日　子ども脱被ばく裁判第 2 回控訴審口頭弁論期日
22 日　報告：北日本「核と基地」問題
　　ネットワーク集会 2022　片岡輝美

■ 3 月

11 日　東日本大震災祈念日
13 日～ 14 日　報告：愛農学園農業高等学校　片岡輝美
16 日　報告：日韓和解と平和プラットフォーム　片岡輝美
19 日　山崎知行医師　おしゃべり会と個別相談
25 日　センター NEWS 第 38 号発送

■ 4 月

9 日　井戸謙一弁護士講演会
　「冤罪と原発事故から人権を考える」　會津稽古堂
24 日　報告：ドイツ・シュツットガルト
　　イチモクの会　片岡輝美

■ ホームページをご覧ください ■

センター関連のニュースや代表の発信する「福島原発核事故関連情報」、「放射能測定地図」を掲載しています。センター NEWS のバックナンバーもご覧いただけます。郵送が不要の方はご一報ください。

■ ML（メーリングリスト）に登録を ■

原発関連の情報やセンター主催のおしゃべり会や学習会の案内を一斉配信しています。

登録を希望される方は、info@aizu-center.org 宛メールで、件名「ML 登録希望」本文に「氏名」を記入して送信してください。

■ センター会員募集と年会費納入のお願い ■

10 月から第 11 期に入りました。年会費や協賛金の送金には、「払込取扱票」をご利用ください。

・年会費：個人会員：3,000 円　団体会員：5,000 円
・協賛金：金額自由で随時受け付けています。
●振り込み先（ゆうちょ銀行口座）
　・ゆうちょ銀行から送金の場合
　　記号：02270-2　　番号：116030
　・他銀行口座から送金の場合
　　店名：二二九　　店番：229
　　種目：当座預金　　番号：116030